

Smile Please! 今、私にできることは何か?

藤原 紀香

藤原紀香です。EX はとても写真が美しく、記事も明瞭で、レイアウトも素敵な新聞なので前々から読んでいましたが、今月から、自身が撮影した写真が掲載されることになり、EX の読者の皆さんにメッセージを伝えられるこの機会に感謝しています。



世界には戦乱や貧困に苦しむ人々が大勢います。阪神大震災をきっかけにデビューした私ですが、「今の職業に就いている私にできることは何か?」と考えてきました。そして、たどり着いたのは、現地に行き、自分の目で見て、人々の生活を伝えること。これまでアフガニスタン、カンボジア、東ティモール、バングラデシュ、ケニア、ベトナムなどカメラを手に多くの国を訪ねました。

チャリティーやボランティアという言葉が何かまだ欧米のようにあたり前ようになっていないこの日本で、私が撮った写真が、人と人が普通に助け合うことのできる世の中であったり、同じ時間軸の中で生きている世界の子供たちのことなどを家族や恋人、仲間、クラスメートなどで話しあったり、行動に移せるきっかけになればとても嬉しいです。

カブールから

お医者さん、学校の先生、エンジニア、大統領!…。あの日、アフガニスタンで出会った子供たちの目は、希望に満ちていました。夢を語り合った瞳には、いま何が映っているのでしょうか。

「9.11」を機に始まった米軍のアフガン空爆で、罪のない村人まで傷つき、多くの命が奪われていました。アフガンで何が起きているのだろう、現場でしかわからないことがあるはず。震災の際に学んだ「現場主義」の思いが私をアフガンに向かわせました。もちろん普通の仕事のロケとは違い、ヘアメイクもスタイリストも同行せず、伝えるためのTVクルー最少人数で向かいました。

2002年7月。降り立ったカブール国際空港には、破壊され真っ二つになった飛行機が何機も放置され、轟音を立てて上空を飛び回る軍用ヘリは銃口を地上の私たちに向けていました。「私は本当に、戦火の国、アフガンに来たんだ」と痛感…。

生々しい戦乱の傷跡が至る所に残る首都カブールで、国際赤十字が支援している「義足リハビリセンター」を訪ねましたが、ここで、地雷で片足を失い、義足をつけた3歳の男の子に出会いました。

「この子はね、どちらが本当の足で、どちらが義足か、まだわかっていないのよ」。男の子の母親は私にそう話してくれました。なぜ、歩行訓練が必要なのかも理解していないのです。私が「足は痛む?」と聞いても、つぶらな瞳で見上げるだけで、何も言いません。

母親が代わって答えました。

「夜になると、毎日泣くんです。こっちの足が、重い、痛いつて…」
必死に立ち、一歩一歩前へ進もうとする男の子の瞳は、私をとらえ離しませんでした。



(藤原紀香撮影)